

| | | | |
|---------|--|------------|-------|
| 氏名 | 中山 紗織 | | |
| 学位の種類 | 博士（コーチング学） | | |
| 学位記番号 | 博甲第 9606 号 | | |
| 学位授与年月 | 令和 2 年 3 月 25 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | ハンドボールにおける育成年代初期の選手育成活動の 歴史的変遷と現状：ドイツと日本の比較 | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士（コーチング学） | 會田 宏 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士（コーチング学） | 中山 雅雄 |
| 副査 | 筑波大学助教 | 博士（コーチング学） | 山田 永子 |
| 副査 | 日本体育大学教授 | 博士（教育学） | 岡出 美則 |

論文の内容の要旨

中山 紗織 氏の博士学位論文は、ドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷と現状を明らかにし、今後、育成年代初期の選手育成に関して新たな取り組みを行うために有用な知見を実践現場に提供することを目的としたものである。その要旨は以下のとおりである。

近年、球技では、長期的な視点を持って選手を育成するために、国ごとや競技種目ごとに様々な取り組みが行われている。ハンドボールに着目すると、ドイツ（国際ランキング 1 位）と日本（同 21 位）では、育成年代初期の試合で「個の育成」を目的に特別な競技規則が導入されている。具体的には、ドイツではコート全面または半面でのマンツーマン防御が規定、義務化され、日本ではオープンディフェンスが推奨されている。しかし、日本代表チームの国際競技力を見る限り、日本ハンドボール協会の掲げる選手育成の理念が全国に浸透しているとは言えない。

第 1 章において著者は、上記のような研究背景を詳細に述べるとともに、国内外における先行研究を概観し、日本の育成年代初期における指導の方向性について検討できる有用な手がかりを得ることが、日本の競技力向上にとって喫緊の課題であることを示している。そのために、ドイツハンドボール協会および日本ハンドボール協会における選手育成に関する取り組みの歴史的変遷について明らかにすること、および両国の指導者の選手育成に対する考え方、練習の内容と方法、その成果としてのゲームパフォーマンスの現状を明らかにする必要があると述べている。

第 2 章において著者は、ドイツハンドボール協会および日本ハンドボール協会が指導者向けに発行している機関誌の 1988 年から 2018 年までの記事を対象にテキストマイニング分析を行い、両国における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷を明らかにすることを通して、選手育成に関する新たな取り組みを行うための根拠を得ることを試みている。その結果、ドイツは、1990 年代にゲーム能力の

系統的かつ長期的な養成に関する理念を提示することによって「子どものハンドボール」の必要性を促し、コーディネーション能力を開発しながら積極的な防御と個人の攻撃力を育成することを中心的なテーマとしていたことを明らかにしている。また、その後は、一貫指導体制を確立させ、マンツーマン防御を義務化した試合形式を実践に適用させるとともに、子どもが楽しめる練習で攻撃力を育成していったことを明らかにしている。一方、日本については、1990年代に個人の攻撃プレー方法を詳細に解説し、海外の育成年代初期における選手育成活動を紹介していたことを明らかにしている。また、その後は、一貫指導システムを展開し、新ゲーム形式の理念を提示していったことを明らかにしている。さらに日本では、個人の技術力および戦術力の養成が重視されていたものの、それらの養成方法については中心的なテーマとなっていなかったことも明らかにしている。

第3章において著者は、ドイツおよび日本の育成年代初期のトップチームを対象に、記述的ゲームパフォーマンス分析および指導者に対するインタビュー調査を行い、両国のゲームパフォーマンス、現場の指導者の持つ「個の育成」方針、練習の内容と方法を明らかにすることを通して、選手育成に関する取り組みの現状を解明することを試みている。その結果、両国は異なる競技規則で試合を行っているが攻撃パフォーマンスに大きな違いはないこと、プレー方法に着目するとドイツは攻撃における全ての局面を一人で解決する試みが多く、日本は攻撃の機能を分担し、個人がチームの歯車となるような役割を果たすプレーが多いことを明らかにしている。また、ドイツはゲーム能力を習熟させることを個の育成方針として、複合的な練習を採用しているのに対し、日本は試合に必要な技術や戦術を習熟させることを個の育成方針として、多くの反復練習を採用していることを明らかにしている。

第4章において著者は、本論文を総括した上で、第2章と第3章で得られた知見から、育成年代初期の選手育成活動において、「個の育成」を目指すという方針はドイツと日本両国とも同じであるが、その内容は異なること、今後日本が選手育成活動に関する新たな取り組みをしていくためには、技術力や戦術力などの要素を個別に養成するのではなく、包括的にゲーム能力として養成する必要があること、選手育成の初期段階において養成すべきゲーム能力が試合を通して具現化されるような競技規則を考案し、その施行を義務化する必要があることを提言している。

審査の結果の要旨

(批評)

中山 紗織 氏の博士学位論文は、選手育成先進国であるドイツと日本における育成年代初期の選手育成活動に関する歴史的変遷と現状を明らかにし、日本の選手育成に関する新たな取り組みを行うための課題を抽出しており、課題を解決するための提言もエビデンスに基づいて行っている。そのため、コーチング学研究領域の発展に貢献するオリジナリティの高い研究と評価できる。今後、育成年代後期の選手育成活動について検討することによって、研究の広がりが期待される。

令和2年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。